企業トップインタビュー

第 34 回

物流イネーブラーとして地域・社会に貢献します。

（※イネーブラー:地域・顧客の発展や課題解決を可能とする上で必要不可欠な存在。縁の下の力持ち）

苫小牧埠頭株式会社

海津 尚夫（かいづ たかお）社長
（2017 年 4 月 1 日賛助会員入会）

【主な事業内容】
・事業内容: 倉庫業/冷蔵倉庫業/港湾運送業/貨物自動車運送業/通関業/穀物サイロ事業（貯蔵・加工）/石油及び関連製品の貯蔵・輸送業
・本　社: 北海道苫小牧市入船町3丁目4番21号
・設　立: 1960年（昭和35年）5月10日
・資本金: 8億7,612万円
・従業員数: 314名（令和6年4月現在）
・売上高: 177億円（令和5年3月期）

今回の会員企業トップインタビューは、日本有数の港湾である苫小牧港を中心に、物流に関わる事業を展開している苫小牧埠頭株式会社 海津 尚夫社長に伺いました。

同社は、苫小牧港開港に合わせ港湾物流を担う会社として設立され、現在では、①港運、②飼料サイロ、③オイルターミナル、④クールロジスティクスの4事業を主力に、道内3支店、東北2支店、東京営業部、貨物自動車運送事業（大北運輸㈱）を擁しています。また、物流を知るプロフェッショナルとして、外部環境の変化に対応しながら、従来の枠組みにとらわれない新たな価値の創造への挑戦を積み重ね、北海道の食と農業の発展や、脱炭素・循環型社会の実現につながる分野を中心に、物流機能の川上・川下に事業領域を広げつつ、北海道および日本経済の持続的な発展を目指しています。

Q. 貴社の創業の経緯・沿革をお聞かせください。

A. 当社は1960年、当時開港を3年後に控えていた、苫小牧港の貨物輸送需要に対応すべく、倉庫業、港湾運送業を担う会社として設立されました。設立趣意書には、「その公共的使命を深く認識の上、理想的取り扱い施設を整え、貨物の積降、荷捌き及び保管等の事業を行い、もって北海道並びに日本経済の伸長に寄与したい」との設立目的を謳っています。苫小牧港開港と同じ1963年に倉庫、港湾運送の営業を開始し、1970年には穀物サイロや飼料専用倉庫で、飼料原料の保管や加工を行う穀物サイロ事業を開始しました。また、1974年に灯油等の石油製品を貯蔵するタンクを設置し、現在は苫小牧と石狩でオイルターミナル事業を行っています。2020年に苫小牧東港において「北海道クールロジスティクスプレイス（温度管理型冷凍冷蔵庫）」の営業を開始し、本施設を中核施設として、食産業の高付加価値化、道産品の輸出拡大に貢献するための取り組みを進めています。

Q. 貴社の経営方針、経営者として重視していることについてお伺いいたします。

A. 2021年に2040年時点で実現したい「将来像」を目指し、「2040ビジョン」を取りまとめました。また、2022年11月には、その長期ビジョンを実現するファースト・ステップとして、新中期経営計画を取りまとめ、当社として初めて公表致しました。これらのビジョンや中計を策定した背景には、気候変動とカーボンニュートラルへの動き、人口減少・人手不足の深刻化、デジタル・AIの急速な進展など今日我々は構造的変革期ともいえる転換点に立っており、その環境変化に適合しつつ当社の強みを伸ばし課題を克服して、持続的に地域・社会に役立つ存在であり続けたいという想いがありました。

そして、こうした想いを表すスローガンとして、「物流イネーブラーとして地域・社会に貢献します」を掲げました。「イネーブラー」というのは聞きなれない言葉かもしれませんが、英語の“enabler“は「～ができる」という“able“から派生して、直訳すれば「何かの実現を可能とする人」という意味ですが、ビジネス界では「他者の課題解決には不可欠な存在」、更にそこから「縁の下の力持ち」的な語感を持つようです。実はこのスローガンは、長期ビジョン検討チームの若手社員から発案されたもので、それを今会社で受け止めて使用しています。自らしゃしゃり出る訳ではありませんが、お客様や地域から頼られ、その業務遂行に不可欠な存在となって支え、世の中のお役に立ち続ける、そんな姿勢を持ち続けたいと考えています。

本社社屋外観

港湾事業部の倉庫

飼料サイロ事業部のサイロ

Q. 事業の特徴点についてお聞かせください。

A. 主力4事業は扱う商品も異なり、背後にある業界も異なりますが、共通して言えるのは、何れも苫小牧の港勢発展の経緯の中で、ニーズをやや先取りして施設を展開し、その後ニーズを拡大してきたということでしょうか。最近では、東港地区におけるクールロジスティクス事業そのもの、あるいは、西港地区で一昨年から実施している道産サツマイモの選果・洗浄及び輸出を含めた集出荷事業などがその典型です。

また、新中計において、物流の周辺領域への展開や課題解決のための新規事業等の推進を計画しており、社内ではこれら事業を「戦略プロジェクト」と呼んでいますが、この関係では、バイオディーゼル燃料のトラックでの利用やペロブスカイト型太陽電池（曲がる太陽電池）の倉庫設置などについて実証実験を行っているほか、物流2024年問題に対応し、広域な道内でのトラック輸送を中継輸送するための事業化検討、液化 CO2 の輸送・荷役プロジェクトへの参画など多方面で取組みを進めています。

オイルターミナル

北海道クールロジスティクスプレイス

Q.コロナ禍前の日常に戻りつつありますが、コロナ禍の影響は如何でしたでしょうか。

A. 事業面では、世界的なコンテナ不足やウッドショックなどの混乱でマイナスの影響はありましたが、旅客輸送や外食・観光などと比べれば、物流の場合相対的に影響は軽微でした。一方、業務運営面では、リモートワークなども取り入れましたが、モノを動かす作業の現場で非接触という訳にもいかないので、コロナ感染者が発生した時に即対処できるようチーム編成を見直すなどで何とか乗り切って来た、というところでしょうか。しかし、人手が潤沢ということではないので、いかに効率を上げていくかという課題も浮き彫りになりました。

Q.人手のお話もありましたが、北海道は全国に先んじて人口減少が進み、労働者不足も顕在化しています。人材確保、人材育成方針についてお聞かせください。

A. やはり採用環境は厳しさが増しています。そうした中、当社の特徴的ともいえる取り組みとしては、地域貢献の一環として道内の大学で講義枠をいただいていますが、これが、物流に関する興味、ひいては当社への関心を高めることに一役買っています。また、先日は、苫小牧工業高校が開催したイベントに、ペロブスカイト型太陽電池のブースを出展するなど、色々な接点を持つ機会を設けるようにしています。

人材育成の面では、まずは入社10年程度の間で、複数の部署を経験してもらうようにしています。これは、仕事の幅を広げるとともに自分はどの仕事に向いているのか、適性を自らが考える機会を与える意図です。その上で、各部署においては、3年ほど前から上司と部下によるワンオンワンミーティングを行うなど、意思疎通を通じたキャリア形成とモチベーション維持に努めています。

Q. 貴社の社風、社員気質などはどのように感じておられるでしょうか。

A. 新中計と同時に、行動指針も見直しまして、「誠実」、「挑戦」そして「地域・社会貢献」の3本柱としました。この中で、当社の社風として「誠実」さが伝統的に一つの強みであると感じています。これは、安全とコンプライアンス重視が求められる環境の中で培われて来たものでしょう。その一方で、前例にとらわれずに新しいことに「挑戦」していく姿勢は今後伸ばしていかなければならない課題と思っています。但し、「誠実」の細項目には「未来への責任」を掲げており、また、「挑戦」の細項目には、「多様な意見の尊重とチームワークの重視」を掲げています。「誠実」と「挑戦」は相反するものではなく、融合してこそ真価が発揮されるはずです。

Q. 働き方改革や女性の活躍に関する取り組みについてお伺いいたします。

A. まずは数値目標として有給休暇取得率の向上を設定し、中計目標の実績比5%アップは前倒しで達成できる見込みです。また仕事と家庭の両立支援のため、育児・介護の休業について法定基準を上回る社内制度を導入しています。

女性の活躍では、作業の現場で就業する女性も出てきていて、現在3名ほどが倉庫のフォークリフトの操作など行っています。今後、機械化・省力化の推進によって力仕事ではハンディのある女性や高齢者の活躍推進、トイレの完備など環境面での充実が課題となってきます。

Q. 最後になりますが、特に印象に残る仕事・事柄や抱負をお聞かせください。

A. 2020年6月に当社役員に就任しましたが、丁度クールロジスティックス事業の竣工・営業開始と重なりました。まさにゼロからの出発で当初不安もありましたが、現在は収容能力の7割ほどの稼働にまで伸長しました。今後、単体での施設運営の安定化とともに、食やコールドチェーンの面的な展開の核施設として活用を検討したいと考えています。

また、戦略プロジェクト、長期ビジョン、新中計は構想段階から率先して進めてきました。計画としては一つの完成系を世に問えたのは良かったですが、「絵に描いた餅」では何もなりません。また、計画策定段階では存在しなかった次世代半導体プロジェクトが近隣千歳市で進められています。環境変化を柔軟に捉えながら、一つ一つ着実に成果を収めていくのがこれからの課題と思っています。